

「日々の理科」(第2622号) 2021,-9,17

## 「オシロイバナの探究(2)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

オシロイバナの場合、アサガオにも増して、さまざまな花の成長過程が一気に観察できる。それも大量に花をつけるので、一人ひとりが多くの花を同時に観察できるのが素晴らしいところだ。



これが「標準的な」一人分の標本である。小さなつぼみ、今夜咲きそうなつぼみ、それに今朝まで咲いていてついさきほどしぼんだ花である。運が良ければこれに「種子」が加わる。写真の一番小さなつぼみでも、内部にはおしべとめしべがはっきり確認できる。今夜咲きそうな花には、ほぼできあがっためしべ、おしべ(葯)が見られ、まだ花粉が観察されないのが特徴だ。



今朝まで咲いていた花を慎重に開くと、1本のめしべと5本のおしべが見られる。いずれにも花粉がついていて、肉眼でも黄色い粒がわかる。



根元の子房の部分を軽くつまんで、花卉をゆっくりひっぱると、子房に直結しためしべ(花柱と柱頭)がスルッと引っ張り出せる。めしべの先端が、渦巻き様になっているのが面白い。



校庭では細部の観察は難しいので、理科室に戻って、ピンセットを使って慎重に分解していく。



5年生の子どもたちにとって、「花の分解」というのは初めてという者も多い。また、花の成長過程で中の様子が変わっていくことにも気づいていく。